
ネギまに生まれた始祖精霊

蒼騎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ネギまに生まれた始祖精霊

【Nコード】

N0023Z

【作者名】

蒼騎

【あらすじ】

ネギまの世界に転生した主人公の話。

この作品は作者の処女作です。温かい目で見てください。
編集の情報は活動報告に書いていきます。

この作品は独自設定、キャラ崩壊、原作崩壊、アンチがあります。
苦手な人は見ないでください。

第一楽章 プロローグ

「知らない空間だ・・・」

なんだこの真つ白な空間は？

はっ！まさかここは二次創作でよくでる神様のいる空間か！

いやいやおかしい・・・俺はまだ死んでないはずだ。これがテンプレ通りなら、俺が何らかの理由で死んだから転生させてあげるって展開のはずなんだがどうということだ？

それともこれはただの夢という落ちか？

「その通りじゃ。これはお主の夢の中じゃ」

神様があらわれた。

俺が振り向いてみると・・・眼に光が入って眩しい！？

そこには顔が輝いていて良く見えなかったが、良く見てみるとそこにはかなり伸ばした髭とツルツルで光り輝く頭をもった神がいた。

神様の神々しい光ってツルツル頭の反射の光だったんだなっと思ひじみ思つと・・・

「お主は失礼なやつじゃな」

ん？思考が読まれてる？

まあ神様の良くある能力か・・・人の頭を覗き見る変態め！

「これこれ、神を変態扱いするんじゃない。」

「で、その変態神様が一体何の用で？それになんで俺の夢の中に入ってきた？」

「それはお主を転生させようかな〜と思ってきたのじゃ。お主の夢の中に来たのは、はつきり言っただけじゃ。基本ランダムで誰の夢の中に入るかは俺も分からんのじゃ」

へ〜

転生か・・・面白そうだ。一度やってみたいと思ってたんだよね。魔法とかあるファンタジーなところが良いな。やっぱ男は魔法と言う浪漫がある世界に行くべきだと思うんだよね。

「ふぉ〜そうかそうか。良かったのじゃ」

「いったい何が良かったというんだ？」

「俺は暇でな。暇だから誰かで遊ぼうと思ったんじゃ。ちなみに転生させようとしたのはお主で7人目じゃ。前の6人は転生したくないと言っただけだったんじゃ」

ふ〜ん。転生とか誰もしたことがなさそうなことを断る人が結構いるもんだな〜
なんでだろう？

「前の6人は大切な人を悲しませたくないとか好きな人と離れたくないって言って断ったのじゃ」

え・・・？普通神様の転生って周りから自分の存在を消して転生させるんじゃないのか？

それなら俺もやめy・・・

って俺にはもうそんな人いね orz

両親はもう死んでるし、好きな人は告つてもキモイの一言ですべて振られるし・・・

別にこの世界に未練なんてないかもwてか前の6人はリア充だったのか。

ん？なんか神様が泣いてるんだけど・・・

「グスツ・・・なんて可哀相な人生なんじゃ。儂からの気持ちとして今転生すると、転生先でなにかを叶えさせてやろう！」

なんて優しい神様なんだろうか！

なにを叶えさせてもらおうかなゝやっぱ転生と言ったら能力だよな。俺最強とかやってみたいしなゝ・・・って待てよ。

「この転生って何の能力なしのただの人として転生させるものだったのか？」

「その通りじゃ。なんで転生するのに能力なんているんじゃ？まあ

お主は今があまりに可哀相なんで能力を1つや2つなら与えよう」

ほっ・・・良かった。

でもこれって喜んだらいいのか、泣いたらいいのかわかんね・・・

「笑えばいいと思うよ」

「笑えねーよ！なに真顔で言っただよ。めっちゃ傷つくわー！」

「まあ冗談は置いといて、転生先で願うことはどうするのじゃ？」

「まずどこに転生するのか教えてくれないか？」

「希望どこでも良いぞ。希望がなければランダムじゃ」

「じゃ『魔法先生ネギま！』の世界で」

魔法が使いたいならやっぱネギま！の世界だよな。

リリなのでも良いけどあそこは管理局がうざそうだし・・・なににより可愛い子が少ない！

ネギま！は正義の魔法使いがうざそうだけど、原作のクラスメイトみんな可愛いらしいからな。

それにエターナルロリータという貴重な存在もいるし！

あっ・・・リリなのにもいるか・・・でもあれはなんか違うんだよな。

「お主がロリコンということがよく分かったのじゃ。あと早く決めてほしいんじゃないか？」

おっと、能力はなんにしようかな

最強でありたいしそれになるべく長く生きたいから吸血鬼つてもありんだけど、原作みたいに吸血鬼だからって狙われるのは勘弁したい。

その条件で俺の知識の中にあるのはやっぱあれかな・・・

「俺を始祖精霊として転生させてくれ。それで『神曲奏界ポリフォニカ』の始祖精霊の能力を悪いところだけ取り除いたやつを頂戴。具体的に言つと、神曲は必要なしで絶望しても死なないようにしてくれ。」

あと羽根の設定として、羽根は基本的に六枚で本気だせば八枚に変わるようにして『神曲奏界ポリフォニカ』に出てくる八柱の始祖精霊の羽根を自由に切り換えて使えるようにして。」

「分かったのじゃ。その願いを叶えよう」

よし！これでほぼすべての属性を使える存在になれる！

「まだ他になにかお願いできる？」

「んっ・・・小さい願いなら大丈夫じゃ」

「それなら俺の生まれ変わる前の今の記憶を忘れないように保存し

てくれ。あと原作の『魔法先生ネギま!』の知識をすべて覚えてるんじゃないかって断片的に残るようにしてほしいんだけど・・・」

「そんなことなら余裕じゃ。他に能力が欲しいとか言うと思ったぞい」

「いやいや、始祖精霊の能力だけで十分だから」

「ならもう転生させるぞい」

「ちよつと待つて。原作のいつに転生させるのかまだ聞いてないんだけど・・・」

「そんなのお主の能力が決まった時にどの時代に転生させるかなんてものは既に決まったようなものじゃ。」

「え・・・?」

「まあ楽しみにしているのじゃ。今のような悲しい人生を送るんじゃないぞ」

神様がそういうと突然上空から裸の小さい天使が降りてきた・・・
天使が・・・降りてくる・・・このシーンは!
なるほど・・・こういう風に転生するのか。
ならここはお決まりのセリフを言うしかないな。

「パトラッシュ・・・僕はもう疲れたよ」

そして僕はどんどん空に運ばれていった。
その途中で、あの名作のキャラは実は転生したんだなと思っている
と意識を失った・・・

第一楽章 プロローグ（後書き）

始祖精霊が分からなければ「ポリフォニカ」のwikiを見てくだ
さい

感想や意見、誤字脱字がありましたら報告お願いします。

第二章 まさかの時代

ん・・・無事に転生できたのか・・・？

身体を動かそうとするが動かない。

おかしいな。身体が動かない・・・それに周りは真っ暗で何も見えないし。

あゝなるほど。始祖精霊として転生したから今は精霊として生まれる途中で身体というより存在そのものとしての状態か。この状態なら普通意識がないけど俺は転生で生まれるし記憶もあるから身体より先に自我が生まれてるのか・・・。

意識はあるけど身体がないから周りを知覚することが出来ないってことか。

ここで精霊について少し教えよう。

ポリフォニカの原作の精霊には2つの特殊な能力がある。

1つ、物質化という能力がある。

これは精霊は精神エネルギーで構成されているため、そのエネルギーを使って物を作ることができる。精霊の肉体もこの物質化という能力で作っている仮初の身体である。

2つ、精霊雷を使う

これは自身の精神エネルギーを攻撃に使って相手にぶつけるとき、そのエネルギーが何故か

雷を纏って飛ぶので精霊雷と呼ばれている。

精霊についての解説も終わったし、暇だから寝よつと・・・

ふぁー良く寝た・・・。さーて身体はどうなったかなー
身体を動かそうとすると・・・動かない。
てかまだ身体が出来てない！

暇だー・・・そうだ、自分の名前を考えよう。

そついえば精霊には名前が必要っていつてたような気がする。精霊
の名前はその存在を表すと言うから偽名とか使えないし一生使う名
前を考えなきゃ！

名前・・・名前・・・なまえ・・・

精霊の名前って確か名・柱名・精名の3つで構成されていたはずだ
から名前を考えるだけでめんどろだな・・・

ポク・・・ポク・・・ポク・・・チーン・・・閃いた！

俺の名前はレイチエル・フォン・オルタードにしよう！

すると突然・・・周りに光を感じた。

「はぁーやつと身体ができたか。さてさてどんな身体になったかな
ー・・・って小さーそれに裸だ！しかも下が付いていない！？」

おいおい・・・俺は女というより幼女になっちまったよ。
それにここはどこだ・・・周りを見渡しても何も無い・・・
まずは状況の確認が必要だな。

「え」と、俺は神様からネギまの世界に始祖精霊として転生させて
もらって女になり今に至ると・・・」

そつだ！始祖精霊として生まれたなら羽根が出せるはず。
それならさっそく羽根を展開してみよう。

「で・・・どうやって羽根を展開できるんだ？」

そんな風に考えていると身体の後ろが光りだし六枚の無色の透明な
羽根が生まれ、身体が浮かび上がった。

「羽根を意識すると勝手に出るのか・・・でも羽根に色が付いてい
ない・・・」

羽根を消して今度は紅をイメージしながら羽根を展開すると・・・
今度は紅い羽根が展開された。

「なるほどね。イメージによって羽根が変化するのか・・・それにしても綺麗な羽根だ」

その後も紅、翠、青、紫、白、黒、銀、金の八色の羽根を順番に展開した。

ふとその時、イメージで羽根の色が変わるなら虹色のように出来るかとも思い試してみると・・・

そこには八色の八枚羽根が展開された。

「虹色の羽根は無理だったか・・・でも一枚一色で八色の羽根が出来たから良しとするか」

あとは自分の力と容姿の確認か・・・

「とりあえず海か湖のあるところに移動するか・・・」

八色の羽根を展開したまま空に向かって飛んだ。

そして上空から海を見つけてそこに向かった。

水の澄んだ海に着いてすぐに海を覗き込んだ。

するとそこには、紅い髪で紅い眼の可愛い幼女の顔があった・・・

「おいおい、ポリフォニカの原作のコーティを幼くしたような顔じ

「やないか！いや、どちらかと言うと幼いフラメルと言うべきか・・・」

今はまだ5歳のような姿だが時間が経てば大人の姿になるだろう。

精霊は長い年月を生きてゆっくり成長するからどれくらいの時間がかかるか分からないけど・・・

まあ可愛いから良いな。満足満足。

さうで、次は能力の確認といこうかな。

「ポリフォニカの原作での精霊の力はすべて雷のような稲妻に見えるらしいけど、このネギまの世界ではどんなふうに変更されるか楽しみだな」

海に掌を向けて・・・力を放つ。

ドォーン！！

海に巨大な水柱が出来て、身体が濡れる。

「は？」

「おいおい、なんて力だよ。」

でも、雷を纏ってなかったな。無色の何かが飛んでいったような感じだった。

たぶんあれが魔力なんだろうな・・・

「うーん、この世界の精霊は精神エネルギーを使わずに魔力を使うから精霊雷は使用できないということか。あくまでネギまにある魔力と魔法を使うことが出来るってことかな」

ってことは俺の身体は魔力で構成されているのか。

力の制御は徐々にやっていくとして、次は非物質化できるかどうか

・
・

「おー簡単に俺の身体が消えた・・・」

しかも視界が前だけじゃなく360度すべて見渡せられる。
って、オエッ！

急に全方位見れるようになると気分が悪くなってきた・・・
この非物質化状態も力の制御と同様に徐々に慣れていこう。
すぐに物質化して今後について考える。

「そうだ、今がいつの時代かわからないから調べよう。」

人にはならないように慎重に空に上がって周りをよく見渡すと、一方は見渡す限り広がる大地で反対側は同じように広がる海があった。周りの気配を察知しようと感じを広げてみるけど、何も感じない・

「あれ？近くに誰もいないのかな？」

ある不安を覚えながらさらに上空にあがり大地を見下ろしてみると、そこには大地と海しか存在していなかった・・・

「おかしい・・・建物がないもない。人も動物も植物も見当たらない・・・まさか・・・」

俺はさつきまで、まず上空に上がって人を見つけたら聞いて確かめれば良いかと・・・安易な考えを持っていたがそれはすぐに砕かれた。

「まさか・・・今は地球の誕生した年なのか・・・」

そんな馬鹿な　！！

俺はこれからどうやって生きていけばいいんだ　！！

第二楽章 まさかの時代（後書き）

次は一気に時代が飛びます

感想や意見、誤字脱字がありましたら報告お願いします。

第三楽章 飢えた者たちとの出会い（前書き）

時代が一気に飛びます

第三楽章 飢えた者たちとの出会い

よっ！

私の名前はレイチエル・フォン・オルタードだ。

ん・・・？私？

そう、私だ。

転生してから数日たって、ふと思ったんだ。

せつかく女になったんだから一人称を俺から私に変えようってな。なかなか慣れないけど時間ならたっぷりあるからその内慣れるだろうと思っている。

そして今は転生してから一週間が経った。

ちなみに私はあれからずっと非物質化状態で生活している。

一週間も経てば360度の視界なんて慣れたものだ。というかなんて便利だと思うようになった。

なんで非物質化状態で生活しているかというと、物質化して生活しているとお腹がすくのだ！

そして今この地球に樹と海と大地など自然だけで生物は存在していない。

精霊は物質化して生活しているとその物質化した生物の体の構造も真似るらしく、人間に物質化したら腹が減るし、眠たくもなるらしい。

だから食べられる物が生まれるまで私はずっと非物質化して生活するしかない。

そしてここからが重要なことなんだが・・・

俺の記憶からネギまの原作知識だけが全部抜け落ちている・・・

前世での自分のことや、読んだ漫画や小説の内容は覚えているんだけどネギまだけがない。神様との白い空間での会話でこの世界には魔法があるということは分かるんだがその程度の知識しかない・・・神様には断片的に残すように言っただけなのに・・・これは神様のミスなのか？

魔法を唱えようとしても、唱えるためには物質化しないといけないから魔法はまだ使うことができない。

そして私は何もすることがなくなっただけ・・・

もし私が絶望で死ぬ本来の精霊だったら私はすでに死んでいるかもしれない・・・

何もすることがない・・・退屈・・・

それを今から何千年と過ごす・・・何も変わらない退屈な毎日を・・・

・

前世でニートだった私は無気力で一日中何もしなかったり、寝てたり過ごして何もしたくねーなんて思っていたがそんなものとは全然違う。

何もしたくないじゃなくて、何もできない・・・

この時、私は退屈は人を殺すという言葉を実際の意味で理解できた。

私は食べられる物が生まれるまでこの世界を俯瞰することしか出来ない・・・

だから・・・

私はこれからこの世界の行く末を見守っていこうと思った・・・

～完～

いやいや！まだ終わらないから！始まったばかりだから！！
とりあえず恐竜が生まれて繁栄するまでこの世界を俯瞰しながら生きていこう！

多分40億年ほどかかるんだろうな～と思いながら意識を薄く広く
拡げていった・・・

そして、自分と言う概念や時間と言う概念を感じずに、ただ世界と
同化したかのように世界を俯瞰していった。

はいっ！ただいま恐竜の全盛期でございます。

ふう～長かった。そして辛かった・・・

なになに辛いという・・・

昆虫や恐竜の生活を見るのが辛かった・・・

ちなみになぜ辛かったかと言うと、生活と性活の両方を見なければ
ならなかったことだ！

世界を昼夜問わず俯瞰していると嫌でもそんな生々しい光景が入っ
てくるんだよ！

この鬱憤は恐竜の虐待で晴らすしかないな・・・

そのためにはまず物質化するか・・・

そして物質化して大地に降り立つ

「おおゝ久しぶりの大地！って私はまだ幼女なのか・・・」

転生してからずっと非物質化状態だったからなゝ肉体は成長してないのか・・・

まあ今から恐竜時代は1億年ほどあるからそれだけ時間が経てば立派なボディに成長することだろう。これは気長に待てばいいな・・・

「腹ごしらえの前にまず私の服を作らなくては・・・このまま裸だとさすがに恥ずかしい」

そう、私は今裸なのだ。すっぱんぼんなのだ。
物質化の能力で服を作ればいいのだから簡単だろう・・・

「えゝと、紅をベースに白の模様がついたワンピースみたいなのでいいか」

ポンッ！

紅いワンピースっぱいが出てきた・・・

が、これは着れない・・・

何故かと言うと・・・出てきたのが服の構造をしてないし、どこにも頭や腕を通す穴がなくて一枚の平らな紅い板が物質化された。

「へっ？何これ？なんで板が・・・」

ポリフォニカの原作での物質化は自分の精神エネルギーを使って物質を作り出すというものだ。確か、ポリフォニカでの物質化は精霊雷の扱いが不器用だと物質化の能力もうまく使えないみたいなことを言っていた気がする・・・

つまり、この世界での物質化は魔力のコントロールが上手くなれば物質化の能力も上手く使えないってことか・・・

ならまずは魔力のコントロールから始めよう・・・あとはイメージ力の問題もあるのかもな。

そんなことを考えていると後ろから樹が倒れるような音が聞こえたので振り返ってみると・・・

「うにゃ ！大きな怪獣 ！！」

恐竜が涎を垂らしながらもの凄い勢いで突進してきていた。

って、恐竜か・・・今まで上空から見てたから分からなかったけど・

・

低い視線から見ると怖すぎる！

それに良く見るとこいつはかの有名なティラノサウルスじゃないか・

・

「よしっ！最初の食料はティラノサウルス、君に決めた！」

私は裸のままティラノサウルスと向き合い、六枚の羽根を展開して

飛んだ。

ティラノサウルスが目前に迫ってきて、ティラノサウルスの飢えた視線と交錯した時、右手に意識を集中しながら振り上げ・・・

「エツチ　　！どこ見てんのよ！！」

バツチーン！

思いつきりティラノサウルスに張り手をした。

すると、ティラノサウルスの頬が抉れ、歯が砕け、首が折れ曲がり絶命した。

「少女の裸を見た者には死を」

ふゝ食料Getだぜ！

数十億年ぶりに飯が食える。しかも肉が食える！！
おっと、涎が・・・

「めっしだ　めっしだ　につくが食える　」

歌いながら死んだティラノサウルスに近づき・・・あることに気が付いた・・・

「どうやって食べよう・・・調理法なんて知らないし、魔法の知識

もないから火が出せない。このまま生で食べないといけないの・・・」

ん？そうか。

この世界にも精霊がいるから魔法を使わずに火の精霊を呼び出して使役すればいいのか。

「魔法の詠唱じゃないが思い立ったが吉日だ。」

「我レイチエル・フォン・オルタードの名を背に召喚す」

レイチエルは朗々と詠唱をはじめた。
静かに。流れるように。

「名を問わず・柱を問わず・枝を問わず・これ数多なる精霊の女王が命なり・我が名に仕えし誉れを欲するなれば・速く馳せ参じよ・・・・フォン・柱名、オルタードの精名、レイチエルの名の下に集い頭れよ」

それは命令の句でありながら・・・何処か子守歌の様に柔らかく優しい響きを帯びていた。

すると・・・地面や空から精霊がやってきた。

一つ、二つ、三つ・・・数えられたのはそこまでだった。

次の瞬間、爆発的な速度で精霊が表われ周りは光に満ちていた。
おそらく、数千数万の精霊がこの場所に集まっているだろう。

『我らレイチエル・フォン・オルタードの御名にお仕えいたすを欲するものなり』

集まった精霊達が一齐に唱和した。

「ご苦労。この恐竜を料理したい。だから料理に必要な分の火を起こして欲しい」

『御意』

レイチエルの言葉に無数の精霊達が唱和で応える。
そして精霊の群れは一瞬で音もなく消えた・・・
まるでその出来ごとのすべてが幻影であつたかのように
残つたのは、数柱の火の精霊と燃え盛る火だけだった。

「この世界の精霊も数千数万集めれば喋れる様になるんだ・・・
その前に精霊の召喚も上手くいつてよかった。」

物質化能力で黒く堅い鉄板の様な謎の物質を作り、料理を開始する
レイチエル。

「じゃじゃーん、ティラノサウルスのステーキ出来上がり」

ステーキが完成した時レイチェルの口は涎まみれだった。
この時代には箸はなくて素手なので、このままだと熱いと思い右手に魔力を集めステーキを掴み食べる。

「ウマー！」

こうして、レイチェル・フォン・オルタードの波乱万丈の一日は過ぎていった・・・

第三楽章 飢えた者たちとの出会い（後書き）

ポリフォニカの詠唱のところは丸パクリしました。

感想や意見、誤字脱字がありましたら報告お願いします。

第四楽章 恐竜・・・（前書き）

第二楽章の大自然のところを編集しました。

第四章 恐竜・・・

私がこの大地に降りて早くも3日たった。

一昨日は周りを散策して安全そうな山の頂上付近で木の精霊に頼んで家を立ててると日が暮れてたのでその日の行動は終わった。

昨日は食べれそうな恐竜を数体狩って風の精霊に頼んで家まで運んでもらい、氷と土の精霊に頼んで恐竜をそのまま凍らせて土の中に入れて保存した。

そして今日から魔法の修業を始める。

まずは物質化能力をあげるために魔力コントロールを修業をする予定だ。

「どうやって魔力コントロールの訓練をしようかな」

前世で魔力なんて特殊なものを持ってなかったのでいまいち魔力がどういうものか分からない。今まで魔力と思っていたのはもしかして気かもしれないし。

手や脚など身体の一部を意識すればそこに筋肉とは別の何かが集まるような感覚があるけどこれが魔力なのかどうかはつきりしない。

「とりあえず羽根をだして考えよう」

まずは紅い羽根を展開してみた。

「いや、やっぱり綺麗な羽根だ。時代が進んでパソコンが普及したらCGを称して羽根を展開した姿の画像を撮ってアップしよう」

未来のコスプレ計画を思い付きながら魔力の制御方法を考えた。

「魔力のコントロールをする前に自分の魔力について把握しないといけないかも・・・それなら座禅を組んで精神統一をして自分の内にある魔力を感じるところから始めよう」

座禅を組み深呼吸をして眼を閉じる・・・

あれから一週間・・・

食えるときと寝るとき以外はすべて座禅を組んだが自分の内に魔力を感じることは出来なかった・・・

おかしい・・・これはいくらなんでも何かがおかしい・・・

「もしかして私には魔力を感じることができないのだろうか・・・」

魔力とはいわゆる精神エネルギーの別称のようなもの・・・ん？

「今何か答えに近づいたような・・・」

・
ポリフォニカでは精霊とは精神エネルギー体として存在していた・
・
この世界の精霊は精神エネルギー体ではなくて魔力で存在している・
・

物質化能力を使つて肉体を作り出しても、作り出した物は魔力で構成されているから自分の身体はすべて魔力で構成されているということになる・・・

身体全体が魔力で構成されてるからその中から同じ魔力を見分けるなんて出来ない・・・

「つまりこの一週間してきたことは無駄だったことが・・・」

「いや、今までの座禅は精神の鍛錬と思えばいい。決して無駄なんかじゃない・・・」

「それなら何故物質化能力は不完全なんだ・・・」

物質化能力は魔力の扱いが下手だと思い通りに物が作れないが、存

在そのものが魔力で構成されている私はおそらく自分の意思で自由に魔力をコントロールできるはずだ・・・

「足りないのはイメージ・・・特に立体的な想像力かもしれないな・・・」

前に物質化した物は平面的で立体構造ではなかった。
ぼんやり思い浮かべるだけではきちんと再現されないのかもしれない。

「今度は立体的に、大きさ、質感、内部構造、どのような物質で出来ているかすべてをイメージして作ってみよう」

む・むむむ・・・

「・・・出来た。真つ赤な幼女用ワンピース」

このワンピースを作るのに10分以上かった。
それに精神力をこっそり持っていかけた・・・

「だが良い出来だ。触り心地も良いし軽い」

物質化能力の検証も終わつたし後は魔法だな。
原作の詠唱は覚えてないからオリジナルでいこう！

オリジナルの魔法を考えるようになってから300年が経った。
そして今・・・

「ふゝはっはっは、魔力を帯びていようと獣は獣。知性がなければ
ただの雑魚に過ぎない！」

「火の精霊よ 我が名の下に集い 敵を滅する道を成せ」

『フレイムロード
炎の道』

呪文を唱えると火の精霊が炎を纏い敵に向かって伸びる。
敵はジャンプして避けたが炎は突然曲がり敵を追尾し、そしてぶつ
かる。

曲がりくねった道ができ恐竜は炎に包まれ炭化した。

「やはり恐竜のボス級といえどこの程度か」

魔法の実験で恐竜などの大型の生き物を殺し続け100年ほど経つと、生き物たちの中に魔力を帯びて産まれる個体が現れ始めた。

魔力を帯びて産まれる個体は同じ生物の中でも特に強くなる。おそらく無意識に魔力で身体強化をしているのだろう。だが意識しているのと無意識でしているのでは精度が違う。

「下級だと傷つく程度だが中級だと一撃死とはなんて微妙な・・・」

「もう魔法については完璧だな。下級は無詠唱で出来るし中級と上級も作れた。それに切り札となる魔法も先日完成した」

この300年は精霊を効率良く呼ぶための呪文を考えるだけで費やした。

私の使う魔法はすべて精霊を呼び出し精霊にお願いして発動するので精霊術と名付けた。

この精霊術は意外と繊細でイメージもまた重要な要素となっているので扱うのが難しい。

例えば、詠唱。詠唱を少し変えるだけで術の威力や効果が違ってくる。先ほど使った火の精霊術を例にすると、「敵を滅する」を抜かし詠唱を短くするだけで追尾性能がなくなるし威力も落ちる。逆に詠唱に「数多なる」を加えて長くすると複数の敵を狙うことが出来る。

また周囲の環境によって威力が大幅に変わる。雨だと水の精霊術が

強くなり、火の精霊術が弱くなる。他には森など木が多いところは土や木の精霊術が強くなる。このように自分の近くにいる精霊の数によって威力が変わってくるが、この場合は精霊を呼び出す部分を長くするといったものの様な威力で精霊術が使えるようになる。

最後に最も重要なのがイメージとなっている。同じ詠唱でもイメージを変えることで術の発動が異なる。先ほどの火の精霊術を例にすると、螺旋をイメージすれば螺旋に炎の道が出来るし、直角に曲がるイメージを持てば敵を追尾するとき弧を描くのではなく直角に折れ曲がるように追尾する。イメージを強く持つと自分を中心として発動させずに相手の後ろ側から精霊術を発動することが出来るようになる。

魔法も完成させて、今生まれている恐竜の中でも最強と言えるやつも先ほど倒した。
すると必然的にやる事がなくなる。

「する事がなくなった・・・」

体術を鍛えようにも鍛え方が分からない・・・
もし私が人間なら筋トレという選択もあるのだが生憎私は精霊だ。
鍛える筋肉がない。

今この世界で敵になる相手は恐竜しかない。しかも知性がなくただ突進するだけの相手だ。それに相手は人間よりはるかに巨大で人の形をしてないから体術を学ぶのは難しいだろう。その上相手はほとんど避けないから全力で殴る蹴るをするだけで勝てるので技術の

向上は見込めないだろう・・・

それならすることは一つしかない。

「武器を使った戦闘をするか・・・」

急遽武器を使った戦闘訓練をすることに。

とりあえず武器を作らないといけない・・・

相手は大きいから普通の大きさの武器じゃ傷を負わす事は出来ても殺すのは難しい。

それなら一撃必殺を目指した大きな野太刀を創造しよう。

想像すること5分・・・

「出来た。武器は日用品とは違い物質化するのに時間がかかるな」

今の私は服など生活に必要なものはすぐに物質化できるようになった。

例えば、服、ベッド、椅子、机、鉄板、箸、ナイフ、フォークなどなど。

「ちょうど向こうの方に獲物があるな」

野太刀を掴んで宙に浮き、野太刀を背負うと獲物に向かって飛ぶ。
なぜ浮かんでから野太刀を背負うかと言うと300年経って成長した今でも私の身体はまだ120cmに届かないくらいだからだ。それに比べて野太刀の長さは180cmほどある。
野太刀の背負った今の私はまさにモンスターハンター。

「ふふ・・・恐竜よ、話が太刀の錆となるがいい」

恐竜にばれないように後ろから近づき、一気に加速して一閃・・・

「鬼人斬り！」

パリーン・・・
「なっ・・・」

さつき物質化した野太刀を斬りつけると恐竜は傷一つ負わず野太刀が砕け、光の粒子となって霧散した・・・
そして恐竜は私の存在に気が付き咆哮した。

「ちょ・・・待った。ここは退散」

再び上空に戻り、さきほどの原因を考える。

「やはり想像で武器を作るには限度があるか・・・一から武器を作るか？いや、それはめんどうだからやめよう。武器や体術の訓練は人類が生まれ技が発達してからにしよう！」

「この時代ともお別れだな・・・」

この恐竜時代ですることがなくなったのでまた非物質化してこの世界を俯瞰して人類が生まれ文明が発達するのを待とう・・・

最後にこの時代に生きた証として隕石にも負けそうにない頑丈な岩に言葉を残そう。

奏よ 其は我らが盟約なり

其は盟約

其は威力

其は悦楽

故に奏よ 汝が魂の形を

もちろん日本語で岩に刻み海に沈める。

将来日本語が世界共通語になればいいな～と思いながら私の体は光となって消えた・・・

第四楽章 恐竜・・・（後書き）

精霊術はネギまに出てくる魔法とほとんど一緒です。

ただ精霊の扱い方が違うと周囲の環境についての話だけ違います。また、上級以上の精霊術は主人公にしか使えません。中級ですでに使役している精霊の数が数千を超えているという設定だからです。

『炎の道』と『燃える天空』は同程度の威力です。

詠唱についても効率を良くすると原作に近くなるという解釈でしました。

主人公は原作の魔法を全く覚えていないので精霊術をオリジナルと自負しています。

野太刀が砕けた件は魔力で強化していなかったこととやはり想像では限度があるからです。（fate風に言うと主人公は剣の属性を持つていないのでどうしても本物に比べると劣るということです）主人公は魔力を精霊の使役とほぼ無意識に近い身体強化だけにしか使用していません。魔力の属性変換など他の使い方を思いついていないのです。

作者は文才がないので修業風景と時代を一気に飛ばしました。

知性のない恐竜だけの世界を書くのは難しく、恐竜相手だけで修業する描写は思いつきませんでした。

すいません

感想や意見、誤字脱字がありましたら報告お願いします。

第五章 出会い（前書き）

アンケートを取りたいと思います

主人公は吸血鬼エヴァと出会いますがエヴァをどうするかです。

？エヴァは原作通り幼女で（妹キャラのように口調は幼くなるかも）

？エヴァを大戦期までに大人に成長させるか

感想のところに？か？だけの数字を書いていただけで構いません。

よろしく願いします。

第五章 出会い

恐竜の時代から姿を消し幾ばくかの時間が過ぎた・・・

恐竜の時代も大きな隕石が落ちてきたことによって地球の環境が激減したことによって死滅していった。魔力を持って生き残った恐竜もいたが子供を成しても周囲の環境に子供が適応できず恐竜の繁栄の時代があっけなく終わった。

その後は霊長類が誕生したり、氷河期と温暖期を繰り返したり、長い年月をかけて霊長類がようやくヒトの形に近づき知性と呼べるものを手に入れていった。

私はその過程をぼんやりと眺めていた・・・

そして、文明と呼べるものが現れ始めると私はまた姿を物質化した・・・

私は今六枚の羽根を広げて空を飛んでいる。

今まで様々な文明を渡り色々な物を見てきた。

戦争や虐殺、奴隷、徐々に体系化してきた魔法使いたちなど長い間見てきた。

どこかで魔法という神秘を目撃した者たちは自らの持つ魔力というものに気付き、独自の魔法を使う奴が増えていった。今の時代は戦争による被害よりも私利私欲のために魔法を使う魔法使いの方が恐ろしい。戦争は事前に察知して対策をとることもできるが魔法使いたちは違う。魔法使いたちはいきなり集落を襲い好き放題やっているのだ・・・

そんな時代の中私は精霊としての力を使い、戦争で孤児になった子供を助けたり、瓦礫の下敷きになった子供を助けたり、魔法を使い暴力を振るう奴に対しては殺したりした・・・

そんなことを繰り返していると世間からは【六枚羽根の天使】と呼ばれ、魔法使いたちからは【紅の断罪者】とか【八柱の大精霊】と噂されるようになった。

「【八柱の大精霊】って言われているけど実際は私一人なんだよね」

毎回羽根の色を変えて現れるようなことをしていたら六枚の羽根をもつやつは8人いるって勘違いされたんだろう。また魔法使いたちと対峙するときは基本的に紅い羽根を展開してたから紅い髪と眼と合わさってこんな呼び名になったんだろう・・・

「はあ・・・魔法の悪用をどうにか減らさないと・・・」

「そのためにあなたの力を貸して欲しい。【八柱の大精霊】の石柱よ」

後ろから突然声をかけられ振り向くとそこにはフードを深く被った人物がいた。フードを深く被っているため顔は分からないがこいつを見ていると何故か頭がズキズキと痛む・・・

「私今忙しい。早々と帰れ」

「魔法の発展と魔法使いたちの安寧のために力を貸して欲しい」

「ふん、そんなものに興味はない」

「あなたの先ほどの言葉・・・どうにかできるかもしれませんよ？」

（こいつの言っていることは本当なのか？すこし確かめてみるか・・・）

「顔も見せない奴を信用できるか。協力してほしいなら力づくでさせてみせよ」

「わかりました」

そう言うとお互いは少し離れ・・・相手が先に呪文の詠唱を始めた。

「契約に従い 我に従え 炎の霸王 来れ 浄化の炎 燃え盛る大
剣 ほとばしれよ ソドムを焼きし 火と硫黄 罪ありし者を 死
の塵に」

「光の精霊よ 我が名のもとに集い 一条の光となり 敵を切り裂
く剣となれ」

『燃える天空』 『光の剣』
フォトンセイバー

同時に詠唱が終わり魔法が発動する。

相手が放った炎と光がぶつかり・・・炎を切り裂きフードを掠めた。

「なっ・・・！？」

「ふむ、人間にしては上出来だな。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「そう落ち込む出ない。話を聞いてやるから・・・お前の名前は？」

「私のことはスオとお呼びください」

フードの奴がそういうとフードを取り顔を見せた。

（女か・・・）

顔を見た瞬間・・・

頭の中に何かが流れ込んできた・・・

ライフ・メーカー

【造物主】

- ・魔法世界を作り、始まりの魔法使いと呼ばれる
- ・造物主の掟という魔法具を持つ
- ・魔法世界の魔力枯渇により消滅するのを察知して『完全なる世界』を組織し、魔法世界の住人を助けようとするが何者かに阻まれる

（これは未来に起こることの映像・・・？そうか、原作での出来ごとか！するとこれが神様にお願ひした断片的な記憶か。今記憶が戻ったということはおそらく、原作のキャラに出会い名前を知ると記憶が戻っていくということか・・・）

「どうしました？」

「なんてめんどうな・・・」

「はい？」

「なんでもない。話を続けて」

「私はある理想を抱いています。それは魔法を自由に学び使用することが出来る、魔法使いたちだけの場所を作りたいのです。もちろん魔法を悪用すれば罰を与えます。そのような場所を作るためにどうか力を貸してください。」

「（なるほど、こういう理想を基に魔法世界をつくったのか）それはどうやって作るつもりだ？ 作るとなると大きすぎるといずればれるし、逆に小さすぎると意味がないぞ」

「そのあたりはまだ計画中です。ただ大きさについては認識阻害の結果というものを開発しましたのである程度の大きさは確保できます」

「（認識疎外ね・・・簡単そうに言っているが近づく人すべてに作らせるとなるとかなり難しいはずだ。よくそんな難しい魔法を作れたな。こいつは魔法の才能があるのかもしれないな）私は何をすればいいのだ？ 手伝えるようなことはないと思うぞ」

「私は先日『契約』という魔法を開発しました。それで、できれば私とその契約を結んでいただきたいのです。これは契約することで主従の関係を作り、主を守るために従者にアーティファクトという魔法具を与えます。このアーティファクトは主の魔力が高ければ高いほど良い魔法具が出るようになっていきます。また契約した主と従者には魔力のパスが繋がり、それにより念話することができ、さらにはある一定の範囲に居る従者を自分の下に召喚することもできる優れ物です」

「それなら私が主でお前が従者で良いな？」

「はい！ お願いします！」

スオは元気よく返事をする。スオの足元に魔法陣が浮かんだ。

「あ、あの・・・この陣の中で、きき！キスをすると契約が出来ます！」

「分かった」

（生涯童貞だった俺がいきなりキ、キスだ！？餅つけ餅つけ・・・って違う！落ちつくんだ俺！スオは眼をつぶっているがこのままだと動揺が悟られてしまう・・・良く見るとスオってかなりの美人だな・・・）

眼をつぶっているスオを見てさらに動揺する私。

（そんなに気負うことはない。今の私は女なんだ。これはただのスキンシップと思えばいい。ええ！女は度胸！！）

「いくよ・・・」

「あの、優しく・・・んっ・・・」

そう言っただけで眼をつむり、眼をつぶっているスオに顔を近づけ・・・唇を重ねた・・・魔法陣が光り出し、2秒ほどで唇を離すと魔法陣は消えカードだけがその場に残った・・・

何も反応を示さず頬を赤らめ眼がとろんとしているスオに声をかけた。

「おい、これで完了か？」

「……………はっ！？ごちそうさまでした！ありがとうございます！
す！」

勢いよくお辞儀をするスオ。どうやらうまく契約が出来たようだ。

「上手くいつてよかったです。なにせ初めて発動させる魔法でしたから不安があっただんです。アーティファクトカードも出だし、魔力のパスも……繋がってますノノアーティファクトカードのオリジナルは持つていてください。複製版は私が持ちますので。また今回の契約は本契約とさせていただきます」

「そのアーティファクトカードとはどのようなものが出たのだ？」

「待つてくださいね。え〜と、主はレイチェル・フォン・アルタード。レイチェル様ですね。素敵な名前です。アーティファクトは造物主の掟という名前らしいです」

「（なるほど。この魔法具を使って魔法世界をつくるのか）早速出してみて。もしかしたらこれからの計画に役に立つかもしれないから」

「そうですね。このカードを持ってアダットと言うと魔法具が出てきます。逆に魔法具を消したいときはアベットと言います。行きますよ……アダット」

魔法具を出す呪文を唱えると・・・大きな杖というより大きな鍵が出てきた。

私が見た原作の形状と同じだったのですこしほつとした。

「これは・・・物凄いアーティファクトかもしれません。これがあれば私たちの計画も上手くいくかも・・・」

「それは良かった。困ったことがあつたら何でも言え、協力する。じゃあね」

さつきキスをしたことが急に恥ずかしくなり、スオの顔がまともに見れない。

おそらく顔が赤くなっているだろうからスオにはれないよう一旦逃げよう。

翠の羽根を展開して飛び去る・・・

「あゝん、待ってください！レイチエル様！！」

第五楽章 出会い（後書き）

未来の造物主との出会いでした。

スオは主人公を姉様と慕う妹キャラでいきます。

造物主のキャラが全然違いますが気にしないでください！

次回はスオ視点の話です。

感想や意見、誤字脱字がありましたら報告お願いします。

閑話 初めての敗北、そして（前書き）

現在、将来のエヴァについてアンケート募集中

？幼女のまま

？大戦期まで大人に成長させる

数字だけでもいいので書いてくれると嬉しいです。

1日に2つ目投稿

閑話 初めての敗北、そして

レイチエル様との出会いから時間は少し遡る・・・

私の名前はスオ。

あるところでは魔法の天才などと言われている。

魔法の開発、魔法の威力に詠唱速度、すべてにおいて他の人より優れている。

魔法の才能に恵まれ、その上人一倍努力をしてきたから天才と呼ばれるだけの自負もある。

だが、最近は天才と呼ばれることにうんざりしてきた・・・

それは周りの人が私の今までしてきた努力を知らずに、私のことを天才と呼び、私と競い合うことをしないからだ・・・

例えば、

初めは私を目標に頑張るとか言っていたが少し時間が経つと、「スオは天才だから簡単だよな」とか「俺もスオの様に天才だったらな」とすぐに諦め努力することをやめるようになった。

そんな中、他の魔法使いたちが話していた噂話を聞いた。それは魔法使いが悪さをすれば、【八柱の大精霊】と呼ばれる中の紅い羽根を持つ一柱【紅の断罪者】に殺されるという話だった。

私はその話を聞き、私以外の魔法使いでそんな簡単に他の魔法使いたちを殺す事が出来るのだろうかと少し興味が湧いた。

【八柱の大精霊】・・・それは魔法使いの間では人の姿をしているが精霊の主で長い時を生きていて六枚の羽根を持ち、羽根の色が違う八柱の精霊が存在していると言われている。他には人の姿をしているのだから、ただの魔法使いで魔力を使って八色の羽根を使い分けてだしているに過ぎないと主張する輩もいる。

このように色々な主張があり謎の多い存在なのである・・・

その噂話を聞いて数日たったある日・・・

私は魔法の研究に一段落が付いてぶらぶら休憩していると、【八柱の大精霊】の目撃情報を聞きチャンスと思い空を飛んで急ぎそこに向かっている。

私のある計画のために・・・

目的の大精霊を探す事30分・・・

ようやく翠の六枚羽根を広げている存在を見つけることが出来た。

・・・が、羽根を広げているのはまだ150cm程の少女だった・・・

なんて凜々しい姿・・・

（大精霊と言われる存在がまさかこんな凜々しい方だったなんて・・・それにものすごい魔力を持っているけど見た目は人間の女性と大差ない。羽根がなければただの人間だと見逃してしまいそうなほど・・・）

初めて噂の存在を見つけた私は羽根を持つ少女の姿に胸が高鳴った。初めは驚いていたがすぐに我に返り【八柱の大精霊】の一柱といわ

れる少女に声をかけようとした時、少女の独り言が聞こえた・・・

「はぁ・・・魔法の悪用をどうにか減らさないと・・・」

（喋った！？しかも独り言？やっぱり人間だったの・・・？）

それに私と同じことを考えている・・・

私も魔法が悪用されるようになってからはどうやってその悪用を減らそうか考えていた。

そして私の出した答えは、魔法使いたちを一か所にまとめ魔法を自由に使えるがきちんと管理する場所を作るというものだ。

この人だったら私の計画に賛同してくれると思い声をかけた。

「そのためにあなたの力を貸して欲しい。【八柱の大精霊】の一柱よ」

なるべく高圧的にならないよう気を付けていうが・・・

「私今忙しい。早々と帰れ」

「魔法の発展と魔法使いたちの安寧のために力を貸して欲しい」

「ふん、そんなものに興味はない」

「あなたの先ほどの言葉・・・どうにかできるかもしれませんよ？」

「顔も見せない奴を信用できるか。協力してほしいなら力づくでさせてみせよ」

「わかりました。（あ・・・フード被ったままだった）」

そう言うとお互いは少し離れ・・・先手必勝と思い私が先に呪文の詠唱を始めた。

「契約に従い 我に従え 炎の霸王 来れ 浄化の炎 燃え盛る大剣 ほとばしれよ ソドムを焼きし 火と硫黄 罪ありし者を 死の塵に」

「光の精霊よ 我が名のもとに集い 一条の光となり 敵を切り裂く剣となれ」

『燃える天空』 『光の剣』
フォトンセイバー

同時に詠唱が終わり魔法が発動する。

私が放った炎と光がぶつかり・・・炎が切り裂かれフードを掠めた。

「なっ・・・!?!」

私の最大呪文があっさり破られる。

それも私の最大呪文より圧倒的に短い呪文で・・・

（すごい・・・呪文は短い割りに詠唱速度は遅いが、それは遅いというより流れるようにゆったりと誰かに囁きかける様な優しい感じ・・・）

「ふむ、人間にしては上出来だな。」

（この人に着いていけば何か分かるかも・・・それに私以上の魔法を使える人なんて初めて・・・）

「そう落ち込む出ない。話を聞いてやるから・・・お前の名前は？」

「私のことはスオとお呼びください」

私は名前を言い、取り忘れていたフードを外す。
すると美しい顔が一瞬、歪んだように見えた。

「どうしました？（まさか私の顔がそんなに変！？）」

内心動揺しながら尋ねる。

「なんてめんどうな・・・」

「はい？」

「なんでもない。話を続けて」

（気になる・・・そりゃ眼の前にいる美しい姿に凛々しい顔をもつ

人に比べたら私なんて平凡な部類に入るんだろうけどさ・・・でも、まずは私の話をしないと）

「私はある理想を抱いています。それは魔法を自由に学び使用することが出来る、魔法使いたちだけの場所を作りたいのです。もちろん魔法を悪用すれば罰を与えます。そのような場所を作るためにどうか力を貸してください。」

「それはどうやって作るつもりだ？ 作るとなると大きすぎるというればれるし、逆に小さすぎると意味がないぞ」

「そのあたりはまだ計画中です。ただ大きさについては認識阻害の結界というものを開発しましたのである程度の大きさは確保できます」

「私は何をすればいいのだ？ 手伝えるようなことはないと思うぞ」

「私は先日『契約』という魔法を開発しました。それで、できれば私とその契約を結んでいただきたいのです。これは契約することで主従の関係を作り、主を守るために従者にアーティファクトという魔法具を与えます。このアーティファクトは主の魔力が高ければ高いほど良い魔法具が出るようになっていきます。また契約した主と従者には魔力のパスが繋がり、それにより念話することができ、さらにはある一定の範囲に居る従者を自分の下に召喚することもできる優れ物です」

「それなら私が主でお前が従者で良いな？」

「はい！ お願いします！」

私はつい嬉しくなり勢いよく返事をして魔法陣を描いた。

「あ、あの・・・この陣の中で、きき！キスをすると契約が出来ます！」

（あゝ緊張します・・・初めてのキスがこんな綺麗な人なんて。それに私からキスをせがむなんて、なんてはしたないことを・・・）

「分かった」

（え！？即答？まさかこの人は経験豊富なのかな・・・？そ、それなら眼をつむって待っていきましょう）

「あの、優しく・・・んっ・・・」

（な、なんて柔らかい・・・それにキスってなにか満たされる気がします）

「おい、これで完了か？」

キスの余韻に浸っていると突然声をかけられた。

「・・・・・・・・・・はっ！？ごちそうさまでした！ありがとうございます！」

その後は契約について話をし、手に入れたアーティファクトを出現させた。

（これが私とレイチエル様との愛の結晶・・・感じる魔力が凄いです）

私がアーティファクトに夢中になっていると突然レイチエル様がどこかに飛んでいった・・・

「あゝん、待つてください！レイチエル様！」

こうして2人での旅が始まったのであった・・・

（絶対に逃がしません！どこまでも追いかけていきます！！）

閑話 初めての敗北、そして（後書き）

次話から更新が遅くなるかもしれません。

週1の更新を目指して頑張ります！

ああネタが欲しい・・・特に魔法世界創造からエヴァに会うまでの・

感想や意見、誤字脱字などありましたら報告お願いします。
できればアンケートに答えて行ってね。

第六楽章 私たちの計画（前書き）

現在、将来のエヴァについてアンケート募集中

？ 幼女のまま

？ 大戦期まで大人に成長させる

数字だけでもいいので書いてくれると嬉しいです。

現在

？ 一票

？ 七表

前話からかなり時間が空きました・・・すみません

第六楽章 私たちの計画

（スオside）

お姉さま（レイチエル）と旅を始めて1年と少し経った頃・・・

お姉さまからの契約で手に入れたアーティファクトのおかげで計画は順調に進んでいる。

つい先ほどこの1年の結晶である転移魔法の開発に成功したところだ。

転移魔法とは壁など障害に関係なく物体を瞬時に移動させる魔法で、今の魔法の知識では実現不可能とされてきたが私のアーティファクト『造物主の掟』の能力のうちの1つであるリロケートという転移能力を解析して作ることが出来た。

この転移魔法を見たお姉さまは今まで考えたこともないようなことを言ってきた・・・

「地球に魔法使いの国を作るをやめて、どこか別の場所・・・例えば火星とかに造るのはどうだろうか？」

私はこの言葉に無理だと思った・・・

私の開発した転移魔法は複雑に出来ている分魔力の消費が激しく、

長距離転移することする難しいのだ。それを地球の外にある火星まで転移するとすると魔力が圧倒的に足りない。
そのことをお姉さまに伝えると・・・

「この地球には霊地と呼ばれる高濃度の魔力が湧き出る場所が無数にある。大気にある魔力とは地球という1つの生命が作り出すエネルギーで霊地はそのエネルギーを放出する場所だ。大きな霊地の魔力を使い火星まで転移するなら魔力など余裕で足りる。だがまあ同じ場所で転移魔法を連続使用して霊地の魔力が枯渇すると魔力を放出する口が閉じて霊地じゃなくなりただの土地になるけどね・・・」

「そんな場所があるんですね・・・でも火星は人が住めるような環境なのですか？」

「火星に人が住むのは難しいだろう。海がなくほとんど水がないし、空気も薄い。なにより魔力が僅かしか存在することが出来ない。火星と言う生命が作る魔力は地球と比べると微々たるもので霊地も小さいから大気に広がる魔力は少なく、広がった魔力もすぐに消滅する」

「お姉さまは火星について詳しいですね。意外です・・・」

「なに、一度火星に行ったことがあるんだよ。私は精霊だから酸素なんて必要ないし暇だったから旅に出たんだよ。まあ一度行って帰るまでに魔力不足で死にそうになったが・・・」

「それで人の住めない火星にどうやって魔法使いの国を造るといふんです？」

「それはね・・・火星の少ない魔力を使って、火星の大地を触媒として大地を覆う様に人が住めるような幻想空間を造り、さらにその幻想空間全体に外から位相をずらす魔法をかけて地球からは元の火星のままに見えるようにすることで、魔法使いだけの世界の誕生だ」

「・・・凄い。それなら上手いきますよ。早く・・・一刻も早く魔法世界を作るための準備をしましょう！」

さすがお姉さま！このようなこと私だけでは思いつきませんでしたし、思いついたとしても方法が分からず断念していたでしょう。これでようやく私の夢が叶う・・・

「まあ待て」

私が喜んではいやいでるとお姉さまが私に声をかけてきた。声が少し暗く聞こえたのでお姉さまの顔を見上げると真剣な表情をしていた。

「火星に魔法世界を造るのには重要な欠点がある。まず1つ目、火星が作り出せる魔力が魔法世界の創造と維持、認識阻害の維持に必要な魔力に届かないかもしれないこと。2つ目、もし幻想空間を作り出せてもその中に魔力は一切ないから溜まるまで時間がかかること。3つ目、国とは違い世界を造るのだから造った後がかなり大変になること。4つ目、地球外に魔法世界を造れるのは『造物主の掟』を持つお前だけ。最後に、幻想空間はいつか必ず崩壊すること・・・」

「

さっきまでの笑顔が最後の欠点を聞いた瞬間に顔色を変えていった。
・

「どうして・・・どうしてそんな崩壊するなんてわかるんですか・
」

「必然だ・・・今の火星は徐々に生命の活動を弱めて行っている。
だから魔力の生成する量が減少しいつか幻想空間を維持できなくな
る。すると幻想空間がなくなり人の住めない火星に人間が放り出さ
れることになる。」

「そんな・・・火星に放り出されたらその人たちが死んじゃう・・・
そんなことが分かっている世界なんて私には造れない・・・」

お姉さまは私にいつかたくさんの人を殺すだろう世界を作れと言っ
の・・・

間接的とはいえ私が原因でたくさんの人が死ぬ・・・考えるだけで
身体が冷えてく・・・

「そんなに震えるな・・・崩壊すると言っても一度幻想空間を創造
してしまえば数千年は確実に持つ。魔法世界内で何も起こらず平和
だったら数万年、あるいは数十万年は持つだろう。それに時代が進
み、技術が進歩すれば火星に人が住めるようになるかもしれない。」

「・・・でも・・・それは可能性の話なのでしょう・・・もし・・・

火星に人が住めないまま幻想空間が崩壊すると考えると・・・」

怖い・・・こわいよ・・・

そんな危険があるなら魔法が人にばれたり、魔法使いが住める場所が小さくてもいいから安全な地球内に造った方が・・・

そんなことを思っていると涙がこぼれ出し、突然なにかが身体を包みこんだ・・・

・ お姉さまが震える私を安心させるように抱きしめてくれたようだ・・・

「泣くな、スオ。人間を信じる。人間は凄い・・・もし幻想空間が崩壊しそうになっても誰かが気づき何とかしてくれる」

私は声を抑え、強く抱きつきお姉さまの胸を借りて泣いた・・・
そして泣きながら意識が薄れていった・・・

＼レイチエルside＼

ふう・・・寝ちゃったか

「それにしてもまさか泣くとは思わなかった」

これで私が映像として見たような魔法世界が造られるだろうか・・・
もしかしたら私の介入で別のものが出来るかもしれない。でも私が
いなければ『造物主の掟』をスオが手に入れることが出来ず魔法世
界なんてものは造れなかったはず・・・

いや・・・そもそも私がいない原作でも造物主は『造物主の掟』を
持っていた。

それに私のいない原作で造物主が持っていた『造物主の掟』と今ス
オが持っている『造物主の掟』は形状が同じだけで能力が違うかも
しれない・・・

あれ・・・頭がこんがらがってきた。このことは考えるのをやめよ
う・・・

そういえば原作知識によるとスオが造物主らしいけど、魔法世界を
造ってそれが崩壊寸前になるまでどうやってスオは生きていたんだ
ろう？スオってまさか人間じゃないとか？？

分からない・・・まあなるようになるか・・・

第六楽章 私たちの計画（後書き）

難しい・・・文章を書くのが難しい

自分の頭の中を上手く文章化できないし、

文字数を増やそうと思ってもなかなか増えてくれない・・・

とりあえず今後の展開が早く考えないと・・・

ネタとか出してくれれば、《もしかすると》採用するかも・・・

感想や意見、誤字脱字などありましたら報告お願いします。
できればアンケートに答えて行つてね。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0023z/>

ネギまに生まれた始祖精霊

2011年12月17日20時34分発行